

ダイキンVRV

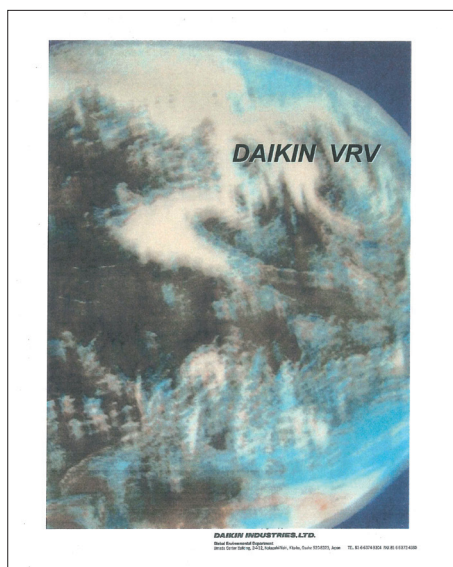
—つながりは心の中で一つの源から発する同類の友—

始まりは、驚きの出会いであった。ASHRAE GUIDE AND DATA BOOK、EQUIPMENT 1972年版に天狗の面で出現したのはDAIKINであった。世界の設備設計者にとって、バイブルに近い存在で、年毎に刷新版が出版され、最新の冷凍、空調の情報を得られるアカデミックな技術誌に堂々と広告されたDAIKINの大胆さは正に天狗の面で読者を圧倒した。その後、ロンドンのオペラはハウスの道路沿いに(1988年)と、ジョグジャカルタの博物館に(1992年)とその商品を見かけるにつけ、世界に羽ばたくダイキンに親しみとその勇氣に感動した。

1980年代から90年代の空調システムは、概して、大型建物では中央熱源(冷凍機、ボイラ)と空気調和機の組み合わせの空気ダクトを用いた空調システムであり、小型建物では、水冷パッケージ型空調機や空冷のルームクーラーであった。パッケージ型空調方式はエンジニアにとってはシステムが簡易で、空調システム設計に強い思いのアメリカの設計技術者にとっては関心からは遠い対象であった。そんな頃、1990年、ダイキン工業、峯野義博氏から、ダイキンVRVシステムを、アメリカで普及、販売するための最初のスタディを委託された。それは「ダイキンビルマルチVRVシステムのアメリカにおける実現の可能性」という命題のスタディであった。

ニューヨークは、一日の中で、温度変化が大きく、冷房、暖房要求が同日中に起こることも稀でなく、それに対応するシステムは受け入れられる気候である。このような気候区でのVRVの実現の可能性は高いが、果たして、アメリカのエンジニア達が、これをどのように考えるかを、利点、問題点から意見交換することで、スタディを始めることにした。まず、技術的に信頼できるエンジニアからなるチーム作りは最初の最も重要な事項であった。

シスカヘネシーで共に働いた旧友、Bryan Atkinson のAKF (Atkinson, Kovern, Feinburg)、名古屋ヒルトンの建設時に日本で会った、Val Lehr、(Valentine Lehr Associate:日本のヒルトンホテル;東京、大阪、名古屋、東京ベイ設計者)、Wayne Robertson (Heery:Atlanta)、Hanscom社(積算の専門会社)、シスカヘネシーの同僚、Stuart Jackson (Syska Hennesy San Francisco)からなるチームが出来あがった。ニューヨーク、アトランタ、サンフランシスコと異なる気候区で業務を営むエンジニア達と率直に意見交換が得られる信頼できるチームの構成でスタート切った。



ダイキン・マッケイ